7. 襟裳岬で難渋、「地獄に仏」と弱音をはく

寛政十二年七月二日 伊能隊は日高本線の終点様似から「えりも（襟裳）」に向かう。陽暦では八月二一日の晩夏だった。

同二日 薄曇、夜も同じ。朝五ツ頃砂馬仁出立。海岸砂小石交り、又は大石を積に似たる道にて行路難し。又海岸に高くそびえたる大岩を上下する所あり、甚危し。又、汐間を見て走る所あり。

砂馬仁は今の様似。海岸の大岩を避けたり、よじ登って越える場所もあって甚だ危ない。潮が引いた時を狙って駆け抜ける場所もあったという。「親知らず」のような感じだが、国土地理院の地形図で見ると、日高耶馬溪地区のこたらしい。国道は山中トンネル、幌満トンネルと2つのトンネルで通過する。確かに大変な岩場である。

案内に蝦夷人を連れけれど折ふし潮満で渡ること難く、或は汐にぬれて三・四町も立帰る。念仏坂といえる蝦夷人のみ往来する険阻なる山越をなしポロマンベツといいる川へ出、(念仏坂の下より侮岸を通れば道路大いに近し) 川を越えて休所あり。

地元案内人をつれてはいたけれど、潮干を狙っていったのに、満ちていて渡れず、潮に濡れて三・四町も戻る。念仏坂という蝦夷人だけが往来する険阻な山越をしてポロマンベツという川へ出る。川を越えて休所ありというが、現在は川を幌満橋で渡ると幌満という集落がある。休み所はこの辺だったろう。括弧内は、割注で、海岸が通れば近いのに、という忠敬のボヤキである。

十四・五町行てヲトロシヤンナという所にて中食。夫より海辺、又は新道二里三十町余、内一里余。夜に入り五ツ頃ホロイツミに着。御詰合支配勘定佐藤茂兵衛殿、会所支配人へ被迎合半町程御用提灯にて迎に人歩（夫）を被遣候。終日難所、ぞうりもことごとく切れ破れ素足になり甚困窮の所迎提灯にあいしハ、俗語にいいる、地獄に仏ともいいうべし。里数七里といえど八里余もあるべし、

オトロシヤンナという地名は地形図では見つからない。留崎あたりのような気がする。幌泉はいまの「えりも町本町」あたりと思われる。一日中難所を歩き、草履も破れ素足とは、恐ろしく気の毒な状態のなかで、出迎えの御用提灯を見た嬉しさを、地獄で仏に会った気持ちと表現する。

測量日記は、喜怒哀楽や、感想・意見は殆ど無くて、坦々と日常業務を記しており、いつも強気な忠敬が、このような弱音をはいた部分は本当に珍しい。

こんな状況なので、歩測も、もちろん出来ていない。おそらく方位と距離の概略だけ把握し、あとは天測値で修正したのであろう。到着の五つ時は日暮れ後約二時間、完全な夜である。

此上汐干といえど通るべからず、併し新開山道も行路難のよし。仮家に止宿。夜五ツ着。

此上が何処を指すのか分からないが、これから先の襟裳岬方向は潮干のときでも通れないという意味であろうか。新開山道はおそらく、前年（寛政十一年）に蝦夷地取締御用の指示で普請役最上徳内らが開削した幌泉の少し南の歌別から東海岸の猿留に抜ける新道を指している。

結局、伊能隊は襟裳岬にはゆかず、新道を抜けた。第一次測量の伊能図には襟裳岬付近は絵を書いて不測量と記している。最終版伊能図では測線は襟裳岬先端に至っているが、これは間宮林蔵の補足測量によるものである。